
俺は彼女と等しい。

野良猫えれき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺は彼女と等しい。

【Nコード】

N5588P

【作者名】

野良猫えれき

【あらすじ】

俺は女の俺と出会っちゃった。

ブローグ

君は、誰かを助けた事があるだろうか？

いや。こんな事をいきなり聞くのは野暮だったな。すまん。

助ける、とは言ってもそんなに深く考える事はない。

誰だって、宿題をやって来なかった奴に、自分の宿題の解答を写させてあげたり、金に困った友に金を貸してあげたり、だとかはした事があるはずだ。

俺の常識で言うならば、これらは『助ける』に値する。

これぐらいの事なら1度やった事があるだろ？

じゃあ、誰かを救った事はあるか？

俺の常識で言うならば『救う』に値するのは、過去を振り返った時に「あん時、救って貰いつていなけりゃ死んでいただろうなあ」とか「あいつに救って貰ったから金持ちになれたんだよなあ」的な言葉がポツリと出てくるような、相手の人生を180度かえちまうような行動を意味してる。

はつきり言うが、そんなスゲー野郎は中々いないと思う。

少なくとも俺の人生の中に、そんな一生をもって感謝してやるような人間は1人も……、いや……1人いるわけだが、まあ、そんなに

いないしな。

だから俺は誇りに思ってたんだ。

彼女を『救う』事が出来た事を。

そんな大した事をした訳じゃないんだがな、あの時の胸の高鳴りは中々忘れられるもんじゃなかった。

……こないだまではな。

本題だ。

己の未熟さを思い知った事はあるか？

いつだったかは覚えてないが「1人で出来ない事は意外に多いものだ」と言う台詞を耳にした事がある。

今の俺には、その言葉の意味がよく解る。

まさか救えていなかった、だなんて思い知らされちゃったら嫌でも実感しちまうもんさ。

だがな、俺は後悔しちやいない。

あの時の「ありがとう」が今も俺の心の中で鳴り響いているんだからな。

出会い

今日は4月7日、入学式当日だ。

暖かい日の光に照らされ散る桜の花びらが、俺たち新入生を快く迎えている。

校内に入ると勿論の事ながら、まず無駄に広い体育館で入学式と言う名の儀式が行われた。

途中で寝てしまう程、普通でつまらない入学式だった。俺の目の前で、長話を続ける校長を名乗るハゲの顔を殴ってやろうか。と思った程だ。

そんな退屈な時間を何とか耐え抜いた俺は、配属された1年3三組の教室へと他のクラスメイトと共に足を踏み入れた。

これから1年間担任を務める青年教師である小野の指示の下、出席番号順に俺達1年3組の生徒は席へ着いていく。

小野は自分のプロフィールを淡々と語る。小野は面白い事を言っている。かなりのギャグセンスを持っていると俺は思ったね。だが、いかんせん。周りは初対面ばかり、場は和まず更に白けちゃった。

話に詰まったのだろう、小野は俺たち1年3組にも自己紹介をするように強要しだした。

勿論の事ながら誰も反論する事はなく、自己紹介は始まった。

出席番号の1番から始まる。

いつも思っただが一番の奴が可哀想で仕方がない。

まあ、かくいう俺も出席番号12番、直ぐにまわってくる……、ヤレヤレ何を言えがいいのやら。

ある者は慣れぬギャグで空気を凍らせ、ある者は名前だけを述べていく。

前の奴が自己紹介を終え座ったので、それを合図に俺は立ち上がる。
「東山空です。よろしく」

それだけ噛まないように気を付けながら述べ直ぐに席につく。

当然の事ながら俺が座るとそれを合図に後ろの奴が立ち上がる。

「遠山宙です。よろしく」

ん？とおやまそら、だと。

1文字しか名前の変わらないソイツに気になった俺は後ろに顔を向ける。

某キョン君なら『えらい美人がそこにいた』と言っのだろうが残念だ。

『女の俺がそこにいた』のだ。

ソイツも名前が一字違いの俺に興味を持っていたのだろう。

振り向くとソイツと目があつたのだ。

数秒が数年に感じられた。

嵐の前の静けさと言うべきか、クラスに沈黙が訪れる。

もう一度、ソイツの顔を確認する。

黒いやる気のなさそうな目、スツと通った鼻筋、目と同じ黒い髪ของショートカットに引き締まった顔の輪郭……やはりどの部分を取っても俺とそっくりだ。

という事はつまり、この現象は、

「まさか、ドッペルゲンガー!?」

行き着いた結論を大声で叫んでしまった。

しかも、女の俺と見事にハモってしまい、俺と女の俺は見事にクラス中の視線を集めてしまったのだった。

何だよこの状況は？悪い冗談であってほしい。心からそう願ったね。

ホームルーム後、俺と女の俺の周囲にクラスメイトが集まって来る。
やったぜ！

入学初日からモテモテだ。と、現実逃避出来たらどんなに楽な事が
大体さつきまで重苦しい雰囲気を漂わせていたクラスが、何故こ
んなに盛り上がっているのだ？

周囲に集まってきた奴等は口々に「貴方達は夫婦ですか？」「まさ
か生き別れの双子？」等のくだらない質問を投げかけてくる。

「せめて1人づつ質問してくれないか（くれないかしら）！」「

今度は語尾以外しつかりハモった。

「俺の（私の）マネをしないでくれる！」「

またハモる。

ハモる事に苛立ちを覚えた俺と女の俺は、火花を散らして睨み合い
を始めた。

しかし、その日の内にクラスの興奮が収まる事はなかった。

こうして俺は遠山と運命的な出会いを果たしたのである。

かくしてクラスメイトのハートを一瞬で掴んでしまった俺たち二人
の名は、全校生徒にアツと言う間に広まってしまった。

休憩時間ともなると、俺と女の俺を拝もうと、他のクラス……、どころか他学年からも拝みにくる始末だ。

「良かったじゃないか」と中学の同級生は口を揃えて俺に言う。

「何がだよ」と言って反論するものの、そう言われても仕方がないことぐらい自分でも理解している。

俺は都市伝説や怪奇現象が大好きなのだ。

この東高校に進学したのも【怪奇部】なるものが存在したからなんだ。

しかしだ。

1億歩譲ったところで「よかった」とは思いたくない、絶対に。

なんだかんだで2週間がたった。

俺は只今、雨の中を1人でションボリ登校中だ。

傘は差しているものの、大粒の雨がズボンの裾を濡らす。

マジ気持ちワルイ。

今すぐ踵を返して家のベッドにダイブしたいところだが、そうもいかん。

部活動見学及び、仮入部が今日からなのだ。

ようするに、念願の【怪奇同好会】に入部できるチャンスなのである。

などと考えつつ、まるで機会のように1歩1歩正確に足を前に踏み出していると、ふと、おかしい光景が目に見え込んできた。

道のド真ん中でクルクル回る人がいたのだ。満面の笑みを浮かべながら、歌を口ずさみながら、名も知らない少女は楽しそうに踊っていた。いやがった。

何よりも気になったのはソイツの着ている服だ。

俺の通い始めた東高校の制服なのだ。

容姿はピンクの髪を持つ、幼女と思われる体型をした可愛らしい子だ。

不覚にもその場に立ち尽くしてしまった俺だったが、直ぐに気を取り直し少女に話しかける事にした。

「何をしているんだ」とね。

すると少女は手を休めずに答えた。

「雨が好きなですよ」

どうやら頭が弱いらしい。

「なるほど、好き過ぎて踊ってる訳だ」

「楽しいしですしね」

コイツは正真正銘の子供なのか？

「あうー。そんな人を見下した顔をするのは止めてですー。これには深い事情があるのですよ」

そうなのか？

「そうなのですよ！それがですね、朝。目を覚ましたら雨が降っていたのですよ」

ふむふむ。

「しかも凄い土砂降りです。雨が大好きな私は、この機会を5感フル活用して楽しみたい！と考えました」

ふむふむ。

「その結果。雨の中で舞えば良い事に気付いたのですよー！」

違った方向に突っ走っているじゃないか。

「どうですか。この想像力！天才的でしょう！」

どう考えてもバカにしか思えん。

「……なるほど、現状は理解した。が、君は学校に行かなくていいのか？」

「……あー、忘れてた」

やはりバカじゃないか。

制服着ているのに忘れるなんて。

「うん、よし！学校へ行くです！」

おい、コラちょっと待て。

「その恰好で行くつもりか？」

俺はビショビショの彼女の制服を差す。

「……確かに」

「それも忘れていたのかよ」

「いや気付かなかったです……」

「もっとダメじゃないか」

「て言うか、すごく寒いです」

やはりバカだ。

俺は溜め息をついた。これだけ雨に濡れれば寒くもなるさ。

「君は何年何組なんだ？」

俺は1応尋ねておくことにした。別に深い意味はないけど。

「私は3年5組」

ゲツ……、こんなバカが先輩かよ。

「君は？」

俺に見せるにはもったいないくらい可愛い笑顔を向けながら訊いてきた。

勿論答えておく。

「1年3組の東山空と言います。ちなみに東京の『東』に富山の『山』そして大空の『空』と書いて『東山空』です。後、先輩に対してタメ口すみませんでした」

頭の中でバカ呼ばわりした事を訂正する気はないがな。

「じゃあ、これから君のあだ名は『カラ君』ですね」

……なんですか？それ。

「ほら『空』って『ソラ』」とも呼べるけど『カラ』とも呼べるでしょ？」

……だから何だというのだ。

「それじゃあ、1年3組のカラ君よ」

「……なんですか」

「縁があつたら、また会いましょう」

それだけ告げると学校とは逆の方向へ走り出し、そして視界から消えた。

これが俺と雨崎美鈴先輩との初めての出会いだった。

遠山宙との出会い程、大きなインパクトを俺に与えられたのは言うまでもないだろう。

今朝の出来事が何だったのか考えていると、既に昼休みになっていた。

この時間は当然のことながら弁当を喰う時間にあてられる。

まあ、入学から一週間程経つまでは、この貴重な昼食は俺と女の俺

を見物しにきた奴等によって阻害されていたと言っても過言ではないがな。

しかし、今ではその騒動も大分落ち着き、ゆとりをもって弁当をつつけるようになった。1人ポツンと食事するのも何なので、俺はこの時間になると中学の時から比較的仲の良かった川久保と、席が近かった月山という野郎と机を同じくするようにしている。

俺はコイツ等に朝の出来事を話した。

「ふむ、それはきつとウサギ先輩だな」と月山。

「俺は先輩から色々とその高校の伝説とか聞いてるんだがな、多分そいつはウサギ先輩で間違いないぞ」

月山は弁当を片付けながら続ける。

「本名は雨崎美鈴。おかしく可愛らしい行動と華奢な体つき、可愛い態度、そして名字の『雨崎』をもじって『ウサギ先輩』って呼ばれているらしい」

俺は今朝の少女を思いだす。

確かに、制服を着てなければ、小学生と間違えてしまうような身長や体付き、そして態度だったような気がする。……ふむ、確かにその『ウサギ先輩』で間違いないかもしれん。

「まあ、今じゃお前の方が有名だがな」

月山が、そう言いながら俺の後ろを指差した。

そこには、俺と同じく良い感じにクラスに溶け込んでいる遠山が弁当をつつきながら、友達と戯れていた。

「ホントにソックリだよー」

美味しそうに卵焼きを口に頬ばらせながら川久保が口を挟んできた。

「そう言えば、お前とアイツ。目が合った時に大声で『ドッペル何ちゃら』って叫んでたよな。あれって1体何なんだ？」

月山が不思議そうに顔を歪める。

「ドッペルゲンガーって言ったんだ」

「それって何か凄いのか？」

少しは自分で調べたり出来ないのだろうか。

「俺は面倒なこととはしないように心掛けているんだ」

月山は胸を張る。

そんな事を心掛けても良い事はないと思うんだが……。

「そんな事はどうでもいいから早く話せ」

俺は「ヤレヤレ」と言わんばかりに大きな溜め息を1つ吐くと、それについて語ることにした。

ドッペルゲンガー現象。

単純な和訳で『2重の歩く者』

死期の近い人物の側に現れる現象。

自分のドッペルゲンガーを見た人はそのドッペルゲンガーに殺されると言われている。

対処法に、そのドッペルゲンガーを罵倒すれば良いと言われるが確証はない。

ドッペルゲンガーは西洋の伝承であるものの、中国には『離魂病』日本にも『影の病』というドッペルゲンガーと類似した内容の伝承が存在する。

過去に、アメリカ合衆国のリンカーンや芥川龍之介が見たと言われている。

「……………って言うのがドッペルゲンガーだ」

「……………zzzz」

「おい、寝んなよ!」

「あー、わりい、わりい」

ニカツと笑いながら、月山はアツサリ謝りやがった。

「でもさー、彼女が君のドッペルゲンガーなわけないよね？じゃないと君死んじゃうんでしょう？」

川久保が口を挟む。

「ああ、そうだな。俺も彼女がドッペルゲンガーではないと信じた
い」

だが。もし彼女が俺のドッペルゲンガーなら死ぬ日は近いかもしれない。
ん。

その時、昼休みの終わりを告げる鐘の音が校内に響き渡った。

まあ、しかしだな。ウサギ先輩（多分）やらドッペルゲンガーなんて言うのは、今はどうでもいいんだ。今、俺が気にしないといけないのは『怪奇同好会』についてのはずだ。

そう、今日から仮入部もある訳だしな。

……そう思っていたんだが、何処に部室が存在するのか分からん。

時は既に放課後。

部活動見学のため1年共が目的の部活を捜して校舎内を歩き回っている時間帯である。

俺もその1人となっている。

目的の怪奇部の部室を目指し校舎をさ迷い歩いている。

捜し始めてもう1時間はたっただろうか。

あらゆる場所を捜したが全く見つかる気配がない。

今日中に怪奇部を拝みたいと思っていたんだが、あと数分捜して見つからなかったら帰ろうか、と心が揺らぎ始めた直後の事だった、
ついに見つけた。

怪奇同好会。

そのように書かれたプレートが旧校舎三階の一番奥の教室に貼られていた。

俺は一度深呼吸すると「失礼します」と言いながら部室へと足を踏み入れる。

そこには今朝出会った少女、つまりウサギ先輩（多分）がいた。

「なぜ、貴女がここにいるのですか？」

「ん？会長だからですよ」

……マジですか？

「マジですとも！」と彼女は無い胸を張り答える。

1度家に帰ったのに、また学校に出て来るとは……、真面目なんです
ね。

「いや、私は家に帰ってないですよ。自慢なんだけど面倒事が嫌いな
のです」

自慢する事ではないですけど、

「見習いたい程潔いですね」

「まあ、部長ですからね」

目を輝かせて彼女は言った。

「そつえば貴女の名前は雨崎……………」

「雨崎美鈴だよ」と彼女はにこやかに言った。

「呼び方はウサギでいいよ、名も知らぬ一年生男子よ」

今朝出会ったとき名前教えたはずなんだが……。

「分かってるよ、カラ君でしょ」

「……そうですよ」と言いながら深い溜め息を吐く。

その直後だった。

「失礼します」という言葉が部屋に響いた。

俺はさっき入ってきたドアの方に目を向ける。

マジで目を疑ったね。

遠山宙がそこにいたのだ。

「「^{アンタ}なんでお前がここにいる!?!」」

2つの悲鳴のような驚きの声がハモる。

俺の隣では「え、凄い!すごい!スゴイ!私こういう状況初めてだよ、流石カラ君だね!」と新しい玩具を与えられた子供の様にハシヤグウサギ先輩が居た。

「ウサギ先輩、少しは落ち着いて下さい」

隣で「キヤーキヤー」

騒がれるのは心臓に悪いのでまず俺は彼女を宥める事にした。

するとウサギ先輩は即答しやがった。

「無理ですっ！」とな。

少しは俺の健康も考えてほしいものだ。

「とりあえず、君の名前は何なのですか？私に教えて」

大声を上げながらウサギ先輩は遠山に詰め寄る。

「……………遠山宙です」

ウサギ先輩の勢いに圧倒された遠山は顔を引きつらせながら応える。
すると先程までの勢いは何処へやら、名前を聞くとウサギ先輩は大袈裟に肩を落とす動作をした。

「「あの、どうしました？」」

俺と女の俺は同時に尋ねる。

すると、ウサギ先輩は「あだ名が被っちゃうじゃないですか」と悲しそうに呟いた。

……………あー、なる程そう言うことか。

「あのー、先輩は多分勘違いしてますよ」

ウサギ先輩が俺の方にテストで零点を取った子供のような暗い顔を覗かせる。

「それじゃあ、1文字以内で述べなさいです」

絶対に無理ですね。

「それじゃあ、心の声で語りなさいです」

それも無理ですね。

「もー、使えないですね」

酷い言われようだ。

「まあいいです、それで、それで？一体何が言いたいのですか？」

「女の俺の「ソラ」って字は「宇宙」の「宙」と書くんですよ」と俺は簡潔に答える。

すると、ウサギ先輩の顔はさっきまでの暗い顔が嘘のように消え、太陽のような輝かんばかりの笑みへと瞬く間に変え、「君のアダナはチュウちゃんね」と告げた。

しかし、女の俺はそれを無視し、

「そんなことよりも……」

などと呟きながら俺に近寄ってきて一言、

「『女の俺』って呼び名は酷いでしょう！」と大声で叫びやがった。

「それでは参考までに、お前は俺のこと何と呼んでいるんだ？」

「……………男の私……………」

同じじゃないか。

「同じじゃないわよ！」

そして遠山と俺は睨み合う。

そんな時だった。

「お久しぶりやん、ダーリン！」

急な挨拶と共に俺は後ろから抱きつかれた。

一般人なら、この余りにも予想だにしない展開に心臓麻痺を起こしちゃうかもしれない。

しかし、俺はそんな事にはならん。

中学時代から、よく急に抱き着かれていたからだ。故に。誰がこんな事するか俺は確信している。

「いきなりそれは止めてくれと何度言えば分かるんですか」

俺は抱きついてきた腕を振り払い、後ろを振り返る。

予想通り。茶髪のツインテールが特長的なキリッとした顔立ちの浅間先輩がいた。

「ん？2人は知り合いなのですか？」

ウサギ先輩が尋ねる。

「ああ」と浅間先輩。

「ウチがこの学校、及びこの部に入ったのもダーリンのお陰ですし！」

「1体どういう意味なのですか？」

ウサギ先輩が更に困惑した顔で尋ねる。

「まあ。簡単に言うた、ある事件にウチが巻き込まれた時にダーリンが果敢にも助けてくれたっつー事よ！」

「あうー。それ、答えになってないですよ……」

ウサギ先輩の目に涙が浮かぶ。

「ふふん、ウチに文章力を問うのは野暮と言うもんだぜ」

浅間先輩は何故か得意気な顔をする。

「じゃあさ、じゃあさ。アッサーは今まで何処でサボってたのですか？部活始まって、ずっと一人は辛いですよ」

どうでもいいけどウサギ先輩は、あだを付けるのが好きみたいだな。

「いやー、野球部の助っ人を頼まれてさ」

見れば浅間先輩の体は所々砂や砂利がついていた。

「先輩は一年前とあまり変わってないみたいですねー、特にそのゴリラ並みの身体能力」

と俺が言ったのが間違いだったのだろう。

浅間先輩に首を絞められた。

「どーゆー意味かなー、ダーリン」

「だからその人を超越した化け物並みの……ウ、ガッ！」

「それぐらいにしときなさい！」

とウサギ先輩が仲裁に入る。

「まあ、ダーリンが謝れば許してやるよ」

と首を絞めたまま言う化け物。

「ほ、んとに……すみませ、んでした……」

朦朧とした意識の中、俺はそれだけ言うと、

気絶したらしい。

目が覚めると、女子三名が楽しそうにだべっていた。

「おう、ダーリンったらやっと思を覚ましたのか！心配したぜー」

貴女のせいだろ。責任とって下さいよ。

「いや。男の私が悪いだろ」

女の俺が何気なく水を差す。

……やはりその「男の私」って言い方は改善がいりそうだ。

「いやー、彼女は面白いね。ダーリンと同じ考え方しとるし、話せば話すほど似ていてびっくりだよ」

そうかい、それは良かったですね。

「それじゃあ、今日はもう日も暮れたし帰るですー」

ウサギ先輩が部活の終わりを告げると勢い良く部室を飛び出す。

それに続き「失礼しました」と言いながら女の俺も部室を後にした。

もう、そんな時間だったのか。なんて思ったりするが、

「一体何を話してたんですか？」

浅間先輩に声をかける。少し気になるしな。

「ウチがこうみえても部長よりも一学年下と言う事と中学時代の武勇伝を少々な」

「まさかとは思いますが、女の俺もこの部に？」

「ダーリンが居ようが居まいが入るとき、ダーリンと一緒にかなりの怪奇現象が好きみたいだしな」

俺は溜め息を一つ吐き出す。

まさか趣味まで被るとは。

「それより私さ、ダーリンの事をちゃんと待ってたよ」

浅間先輩が頬を赤く染めた。

「ああ、浅間先輩が卒業式の日に言ってた『東校の怪奇同好会で待ってる』っつー、一方的な約束の事か」

「流石ダーリン、覚えてたんだ！」

浅間先輩の顔が綻ぶ。

「まあな、あんな約束忘れられませんよ」

「よしダーリン、私達も帰りましょう！というかホテルに行きましよう！」

「一人で行けよ！」

そんな平凡な（？）会話をしながら俺達も仲良く部室を後にするのがあった。翌日の放課後。

俺は川久保、月山とどの部に入るか教室で談笑していた。

「まあ、俺は【世界一自由に活動可能な部】に入るつもりだがな」と月山。

要するに帰宅部のことだろうが。

「果たしてどうかな？」と言いニヤリと笑った。

うざいぞ月山。

「そんな事言ってるテメエは何処に入るつもりだよ」

「俺は怪奇同好会に入るつもりだ」

「……ふむ、なる程。怪奇同好会か……」

川久保よ、急にどうした。

「よし、僕もその部に入る」

「なーに言っちゃってんだよ」と月山が笑い混じりに言った。

どうやら月山は川久保が冗談でそう言ったと思ったらしい。

残念ながら絶対違う。

コイツが言う事はいつもマジだからな。

「そうと決まれば早く行くよ!」

川久保が俺の袖口を引っ張り歩き出した。

ほら、やっぱり。

「じゃあね、月山君」

と教室を出て行く寸前、川久保はそう言った。

「お、おう、頑張れよ!」

月山よ。何を頑張れと言うのだ、とか心の中で突っ込んでいる間もズンズン川久保は廊下を突き進んで行った。

川久保よ、道わかんのか？

「わかんない」

わかんないのかよ。

「己の信じた道を進んでこそ真の人だからね」
んな無茶な。

俺は溜め息を吐くのだった。

10数分後。

俺と川久保は怪奇研究部の前に居た。

コイツは俺1人で二時間近くかかって捜し出した場所を10分程度で見つけ出したのである。

有り得るのか？こんな事って。

俺が啞然とし立ちすくんでいると「失礼します」と言いながら川久保は扉を開けた。

部室には既に女子3人が雑談していた。

「もう、カラ君来るのが……あれ、そちらの子は誰かな？」

て言いながらウサギ先輩は川久保を指差した。

「初めまして、川久保っていいいます」

川久保は爽やかに挨拶をした。

一瞬。部室の空気が固まった。まあ、急に自己紹介なんかされちゃ日にゃあ、こんな事も起こるだろうさ。

そんな雰囲気は初めに壊したのはウサギ先輩だった。

「じゃあ、君のあだ名はカワワンね！」

真面目な顔してウサギ先輩はそう告げる。

待て。その返答は変じゃねーか？と心の中で呟いてみる。

すると浅間先輩が「今までで一番意味解らねーよ」と言い爆笑し出した。

あ、……意味わからんと感じていたのは俺だけじゃなかったんだ。

「ふーんだ。私ぐらい天才になるとすね、あだ名に意味を込める必要はないと気付くもんなんだよ！」

浅間先輩の言葉に反応したウサギ先輩は何やら言い返す。が、その反論もやはりおかしくないか？

そんな浅間先輩とウサギ先輩の会話の中に川久保は水を差す。

「まあ、僕はカワワンでもいいけどね」と。

つーか、いいのかよ。

「人間中身が重要だろ？」

スラッと格好いいこと言うな、気持ち悪い。

「それが僕クオリティだよ」と言いウインク。

なんで俺の周りには口クな奴が居ないんだ？呪われたかな？

「それでさ。この部の主な活動内容は何なのかな？」

そう言えば俺も知らん。

「主に此处に置いてある怪奇現象関連の本を読むことですよ！」

ウサギ先輩が偉そうな顔して告げた。

俺は周囲を見渡す。

昨日は気づかなかったが、意外に広い部屋にはスチール製の本棚がズラリと並び、その中にはビッシリ分厚い本が置いてあった。

「どう？ 凄いでしょ！」

ウサギ先輩が昨日のようにない胸を張る。

……というか、凄いや凄くない以前に、

「「内容薄ッ！」」

何でかな。またしても女の俺とハモってしまった。

「ハハハ、コンビはここでも健在だね」

笑うなよ。授業中でさえよくハモる為、夫婦漫才とか言われて俺は心に傷を負ってたぞ。

「うん、そーだね」

そーだね、で済ますなよ。

「ねー。内容薄いつてどういう意味よ！ちゃんと説明してですよー」

「「そのまんまの意味だよ（意味よ）！」」

敬語すら忘れてウサギ先輩に突っ込む。

「「だからハモるなつて言ってるだろ（言ってるでしょう）！」」

そして無駄に女の俺と睨み合いを始める。

「ハーイ、質問いいかな？」と川久保は手を挙げる。

「な、何かな？カワワン」

俺達の雰囲気吞まれかけてたウサギ先輩が川久保の呼び掛けに過剰な反応を示す。……まあ、俺は今、この顔のよく似た女と睨み合う事に必死だから謝るつもりとか毛頭ないけどな。

「カラとかチュウつてどういう意味かな？」

「二人の下の名前を文字るとそうなるのですよ」

と調子を少し取り戻してきたウサギ先輩が自慢気に説明する。

川久保は数秒考え込むとすぐ顔を上げて一言、

「理解出来ました」と言いやがった。

「すげーな。あんな説明で理解出来たのか。」

「僕もこれから君たちの事をカラ君とチュウ君って呼ぶからね」

「マジかよ。止めて欲しいんだが。」

「だって名字も名前も一文字違いじゃ区別出来ないんだもん」と言い川久保は困った顔をする。

「く、言い返せん。」

「それで、貴女の名前は？」

「ああ、私はこの同好会の会長の雨崎って言うの、ウサギって呼んでね」と飛びつきり可愛い笑顔で言った。

あの笑顔は可愛い過ぎて凶器だな。

「じゃあ、貴女は？」

川久保は浅間先輩に向けて質問した。

「私は浅間だ。そしてこのお腹の中にはダーリンことカラ君の赤子が、」

嘘を言うな、嘘を。

「そんな、三か月よ！」

「ちょっと待て嘘の中身重すぎだろッ！」

てか不安になってしまっただろうが。

「ま、まさかカラ君その年で、」

「男の私が、まさか、そんな……！」

待て待て、可笑しいだろ。

「ねー、どう落とし前付ける？」

何故そんな話になってんだ？

というか、だ、誰か、

「助けてくれー！」

とある四月の夕方、俺の叫びは虚しく部屋に響くのだった。

こんな日々が俺は一生続くんだろうなって、この時の俺は直感したね。

だが、世の中ってそんなに甘く無いんだよな。

この後、つまり部活後の事だが……、俺の知らない所で『彼女』は死んだ、らしい。

いや、信じられないんだよ。

と言うのもな『彼女』は、今後も学校にしっかり登校して来る訳なんだしな。

もし、俺の人生が狂った日が有ったとしたらなら、俺は迷わず『この日』だと言うだろう。

明日からは、ゴールデンウィーク。

それが俺の『最後の晩餐』だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5588p/>

俺は彼女と等しい。

2010年12月30日23時11分発行